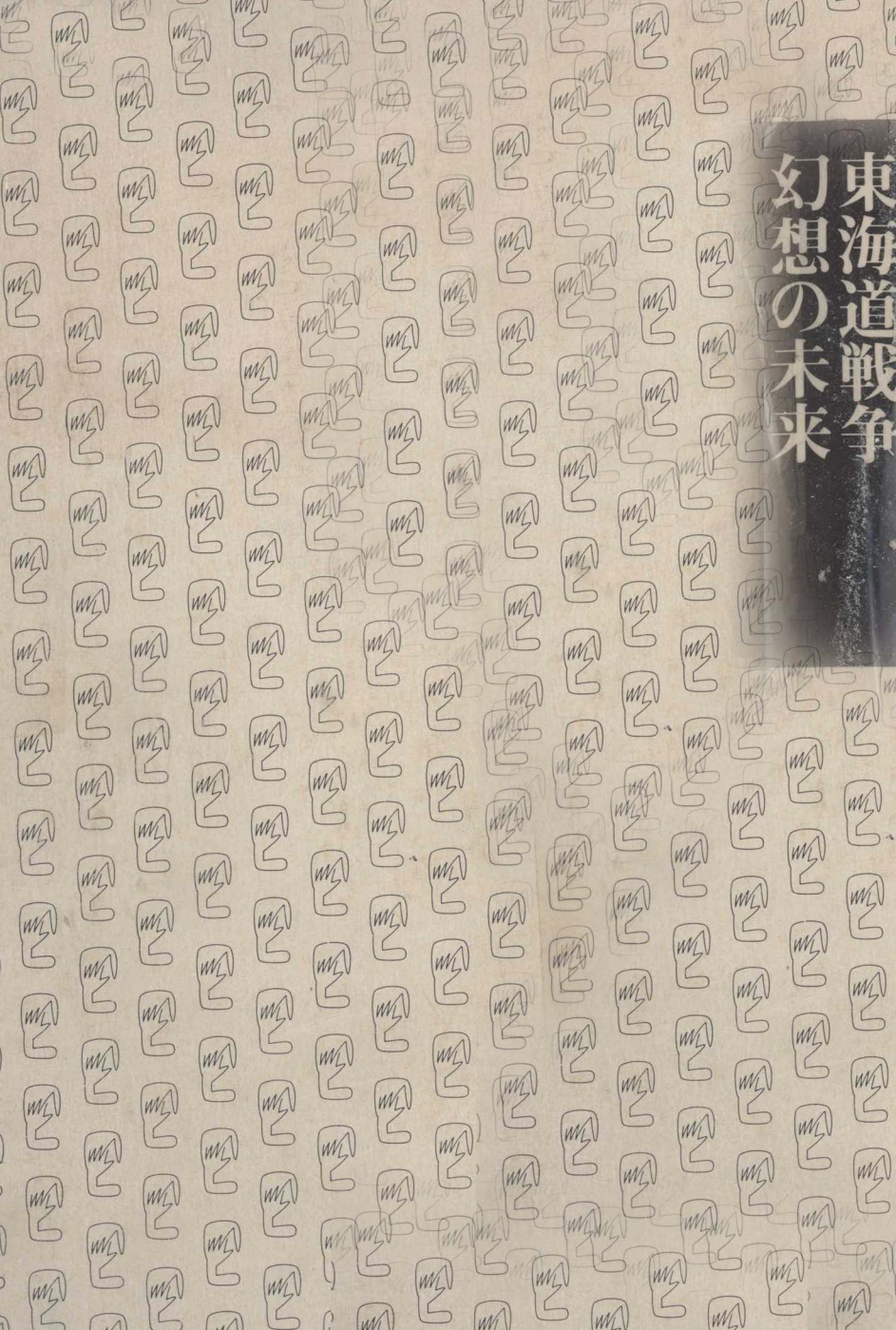


東海道戦争 幻想の未来





筒井康隆全集 1
**東海道戦争
幻想の未来**

新潮社

とうかいどうせんそう げんそう みらい
東海道戦争・幻想の未来



筒井康隆全集 第1巻

昭和五十八年 四月十五日 発行 昭和五十八年 五月二十日 四刷	定価一五〇〇円	著者 筒井 康隆	発行者 佐藤 亮一	発行所 株式会社 新潮社	東京都新宿区矢来町七一(千一六二) 電話 業務部 東京(〇三)二六六・五一 編集部 東京(〇三)二六六・五四一 振替 東京 四一八〇八番	印刷 大日本印刷株式会社 製本 加藤製本株式会社	乱丁・落丁本は、御面倒ですが小 社通信係宛御送付下さい。送料小 社負担にてお取替えいたします。
------------------------------------	---------	----------	-----------	--------------	---	-----------------------------	---

© Yasutaka Tsutsui 1983 Printed in Japan

ISBN4-10-644401-1 C0393

筒井康隆全集第一卷・目次

短篇

き つ ね	二 元 論 の 家	マ リ コ ち ゃ ん	無 限 効 果	衛 星 一 号	到 着	環 状 線	脱 ぐ	帰 郷	タ イ ム ・ マ シ ン	模 倣 空 間	お 助 け
59	48	48	40	38	38	34	26	23	18	14	9

パ チ ン コ 必 勝 原 理	差 別	セ ク シ ヨ ン	怪 物 た ち の 夜	逃 げ ろ	コ ド モ の カ ミ サ マ	ウ イ ス キ ー の 神 様	神 様 と 仏 さ ま	事 業	廃 墟	底 流	ユ ミ コ ち ゃ ん
93	90	88	85	83	83	81	80	78	73	61	60

やぶれかぶれのオロ氏	97
たぬき	107
姉弟	109
睡魔のいる夏	111
ある罪悪感	116
スパイ	120
妄想因子	122
怪段	123
超能力	125
下の世界	129
ブルドッグ	145
陸族館	151
座敷ぼっこ	153

群猫	159
給水塔の幽霊	166
いじめないで	168
トーチカ	182
お紺昇天	188
しゃっくり	198
うるさがた	216
ベルト・ウェーの女	226
無人警察	232
星は生きている	238
火星にきた男	240
東海道戦争	245

長 篇

幻想の未来……………273

エッセイ

D A I C O N
プログラム巻頭文……………347

精神病院ルポ……………352

インサイド D A I C O N ……348

解 説

関 井 光 男
360

東海道戦争・幻想の未来

装
幀
山
藤
章
二

短

篇

お助け

最初、それは細君との口論からはじまった。妙にノロノロしい方で彼女は彼に、数日来の不満をぶちまけたのである。

「あな たつたら、この頃、何をしゃべってるのかわかりやしないわ。すごい早口でペラペラまくし立てるし、わたしが返事してしまわないうちに、またつぎのことをペラペラしゃべり出すし、まるで舌がまわり出して止まらない見たいよ。それにあな たつたら、この頃どうしてそんなせつちになつたの？ 研究所から帰つて来た時なんか、まるで人殺しに追いかけられてるみたい、家のなかへすごいスピードで駆け込んで来たかと思うとバタバタと着換えをして飲み込むみたいにご飯を食べていったい何をあわてるのかと思つたら、それから新聞を読み出すじゃないの。いったい何のつもりなの？ 子どもがびつくりしてるじゃないの。忙しがつてる真似なら研究所だけでたくさんよ。家のなかへまで、そんなせつちいた雰囲気を持ち込まれちゃ、たまらないわ。ねえ、何をそんなにキョロキョロおちつか

ないの？ ほらほら、また時計を見るのね？ いくら時計を見たって同じじゃないの。時間の早さに変わりはないわよ」

そうだ。その「時間」なのだ。彼には、時間の経つのがろくなつたとしか思えないのだ。

細君にかぎらず、研究所の同僚にしても、道を歩いて行く人間たちにしても、どうしてみんな、あんなにノロノロ動きまわり出したのだらう。話をすれば、そのテンポのろさにイライラしてしまつて、つい相手が話し終らない間に返事をしたり、つぎの話題に移つたりしてしまつて妙な顔をされてしまふ。

昨日も同僚から実験の報告を受け取つた時、何もひつたくらなくつたつていいだらうといやみをいわれた。

いったいいつからこんなことになつたんだらう？ いったいどうしてだ？

彼は考え込む。

一カ月前までは、こんなことはなかった。いや、最近だつて何も、わざとせつちいたり、早口でしゃべつたりしているわけじゃない。ごくあたり前に話し、当り前にふるまつてゐるつもりだ。周囲の世界が変化したとは思えない。そういうえば、一カ月ほど前からだ。時計を見て、おや、まだこんな時間だつたかと不思議に思つたり——そうだ、一度など、てつきり腕時計が遅れると思つて、ラジオの

番組と照らしあわせたりしたっけ——電車がイヤにのろのろと走るので遅刻するんじゃないかとイライラしたり、朝、妙に早く眼が覚めたり、晩は晩で妙に早く眠くなったり……。いったいこいつは何事だろう。

とにかく、まともじゃない。といって肉体的には正常だし、頭も別におかしくはない。とするとこれは……わからない。とにかく、ただごとじゃない。

彼は考える。だがわからない。彼は周囲の世界がだんだん自分から離れて行くような不思議な感情におびやかされる。彼は自分が孤独だと感じる。その孤独感、しだいに強くなって行く。彼は自分が精神病じゃないかと疑う。医者に診てもらう。どこも悪くはない。彼はますますわけがわからなくなる。

彼はアストロノミクス研究所の所員である。それは、おもに宇宙ロケットのパイロットの養成をしている宇宙航行技術の研究所で、ほとんど政府の補助金で活動をしている。彼はそこでスペース・ネヴィゲーター（宇宙航空士）としての肉体訓練と実験を受け、アストロゲイション（空間航行学）を学んでいるのだ。

彼は小さい時から、無神論者であり、性格的には粗野で、道徳感にとぼしかった。青少年時代を、不良グループの兄

貴分として過し、いろいろな小悪事を働いた。やがて彼は、彼の性分に合わない狭苦しい地球が厭になり、ひろびろとした大宇宙にあこがれ、二十八歳になってロケットのパイロットを志した。彼は自分の無道徳的性格を生かす道を、やつと見つけ出したと信じた。

大宇宙には、地球上のようなコセコセした法律はなく道徳もない。強いていえば、そこにあるのは宇宙意志だけだ。そして彼は、自分こそ、その宇宙意志になりきるので、固く心に誓ったのである。

三年前に結婚し、子ども一人ある。だが、そんなものは彼の野心を人びとに気づかれぬようにし、世間体をつくらせておくために過ぎない。

五年前、政府が大々的に行なった公募に応じて、全国から集まったテスト・パイロットの候補者は、最初数百人いた。だが、そのほとんどが最初の加速実験で落第した。まるで肋骨が折れ、臓器が飛び出しそうなものすごい圧力に耐え兼ねて悲鳴をあげたのだ。心臓麻痺で死んだ者も数名あった。つぎつぎと激しさの加わる加速実験で、最後に残ったのは彼一人だった。すばらしい体力であり、超人的な忍耐力であった。

その後数年間、たった一人のテスト・パイロットとして、宇宙ロケット内でさまざまな現象に耐えるための訓練と種々の人体実験を毎日受け、彼の身体はますます鍛えられ

た。

だが、そんな彼も、一カ月前から起り出した、この説明のつかない不思議な現象には、すっかりノイローゼになつてしまつたのである。

細君との口論があつてからさらに一週間たつた。

彼は自身自身のテンポが、外界のテンポとまったく不調和になつてしまつてゐるのを見出した。

彼の一時間は外界の二時間分に相当し、外界の一日は彼の半日のテンポになつてしまつたのだ。人びとは彼の倍の緩慢さでしゃべり、動作し、考え、そして眠る。彼は昼過ぎになると、すでに睡眠の必要に迫られ出す。

訓練が日常茶飯事となり、どんな激しい実験もなんら苦痛を感じなくなると、今度は反対に、世間との交渉が激しい苦痛をともなう義務として、彼に向つて来たのである。世間のあらゆる物事の進行に彼のテンポを合わせて行くことには、大変な肉体的精神的苦痛がともなつたのだ。

彼の細君にしても子どもにしても、研究所で彼と接する所員たちにしても、彼のめまぐるしい動作と鉄砲玉のようなスピード言語には、もう完全に追いつけなかつた。彼をばかんと眺めてゐるだけだつた。

どんな手段であるにせよ、彼への伝達、彼との交流が不

可能に近いほど困難であることを悟つた時、人びとは彼を無視しはじめた。彼にとつては、無視された方がありがたいくらいだつた。何といつても、異端者は彼自身なのだから、他人と歩調をあわせる苦痛にくらべれば、他との交流のない孤独の方がずっと楽に思われた。

だが、しばらくすると、さすがの彼もいいあらわせないほどの深い孤独感の襲来に、そろそろあせりはじめたのである。

さらに一週間。

彼と世間とのテンポの差は、加速度的に大きくなつて行くばかりだつた。やつと近頃になつて、彼はこの不思議な現象の説明らしいものを、一つだけ考えついた。これはおれの受けてゐる、あの実験——超現実的な、人間の能力の限界を超越しようとするあの訓練——が原因らしい。論理的に説明できる知識の持ちあわせはないが、どうやらおれはあの加速実験で、人間の作つた時間と、それにもなる進行の速度を、肉体的精神的に受け入れられなくなつたに違ひない。とするとおれは、おれの望み通り、地球人であることから脱け出し、宇宙意志になりきることへの一歩を歩み出したわけではないか。悲しむべきことではなく、むしろ喜ぶべきことではないか。

だが、そうはいうものの、彼はやはりこの孤独感にはま

いつていた。宇宙意志への道を歩いて行きながらもその彼にたいする世間的な反応が、彼はつねにほしかった。あるいは、はげまし合いながらこの道とともに歩んで行く者がほしかった。彼は現在の状態のままでは、発狂するより他ないと思った。彼一人だけが先へ先へと歩いて行き、すれ違ふ人たちの彼にたいする反応は、彼にとってまったくないも同然だった。

まるで停止しているかのようにのろろと歩を運んでいる通行人の眼の前を横切っても、彼らの反応は、今、すでに早さで駈けて行ったのはいったい何だったのだろうと、すでに百メートルも先を歩いて行く彼のうしろ姿をいぶかしげにぼんやり眺める程度だった。そのうしろ姿さえも、彼らの眼にははっきりとは映らないのだ。

横断歩道を渡る必要は、彼にはなかった。それでもゆくりゆくりと走ってくる車をよけながら、向い側の歩道へたどり着いている間は、まだ何となくスリルがあり、少々こっけいな感じがしておもしろかった。だがそのうち、車の速度がまるでかたつむりのようにのろろと、まるつきり停止しているかのような走り方になってきた頃には、彼はあたかも灰色の空虚な無生物ばかりの世界にまぎれ込んだような気持ちになり、そして自分だけが動きまわっているということにかえって耐えがたい不安を感じ出すようになった。

まったく、すべてが静止していた。

人びとは、さまざまなポーズをしたマネキン人形のように、町中のいたるところに突っ立っていた。走っている人間は、両足をながい間宙に上げたまま、地面から一フィート位の空中に浮かんでいた。犬や猫も、まったく剝製のようになり、そして車は、ちょうど大バノラマの模型のように、町中にゴロゴロ転がり、散らばっているといった感じだった。

彼は、しばらく前から研究所へ行くのをやめていた。しばらく前といっても、実際には五日前からなのであるが、彼にはこの五日間が、二カ月以上にも感じられた。何もすることがないままに、あてもなく街のなかをうろろろと一時間も歩きまわり、行き当りばったり豪華なホテルへ入って一時間睡眠する。眼が覚めても、周囲の変化はほとんどない。彼は、気を強く持てと自分にいい聞かせた。何、発狂なんぞするものか！

盲目的に信仰していた科学から裏切られたような気持ちになり、孤独が彼の身体を取り巻き、世界の壊滅感が彼の身を包むと、彼の心にはふたたび、あの少年時代の神を恐れぬ不道德な衝動が湧き上って来た。だが、その不道德さは、今、彼が住んでいる世界では不道德と呼ばれるものではなく、もちろん悪でもなかった。

静まり返った銀行のなかで、さまざまなポーズでじっと

している銀行員たちの手から、真新しい札束を引ったくつたところで、その反応はないも同然だったし、第一、彼には札束そのものが不要であつた。

レストランには豪華な料理が並んでいたし、テーブルの前に坐っている人たちは、その料理を食べるかつこうをしてゐるに過ぎなかつた。

町一番のホテルでは、宴会が開かれていた。一流の名士たちや、その美しい夫人や令嬢たちが、着飾り、あでやかなボーズをとっている、まるで名画を立体化したような雰囲気の中、彼は一人、勝手気ままに動きまわり飲み食いした。

彼は淋しさをまぎらす手段として、いろいろないたずらをした。

通行人たちのポケットから財布を取り出し、歩道へぶちまけて見たり、急いで歩いている二人の男を向い合せにおき変えて見たり、公園の木陰で若い娘と抱擁している男の腕から、娘を抱き去り、かわりに新聞売りの老婆を連れて来て抱かせておいたり、寝室の美女を抱き上げて来て、むき出しの姿のまま繁華街の四つ辻へ転がしておいたり、考えつくかぎりのいたずらを尽くしたが、それとて彼の淋しさをまぎらすことはできなかった。

いたずらは反応、あるいは反応の予測を喜ぶためのものであり、反応のまったくないいたずらは、いたずらとして

の価値はなく、いたずらと呼べないものだとは悟つた。つぎには彼に、激しい破壊の衝動がやってきた。

彼は大声で罵り、わめき散らしながら、棒切れで街中のものを片っ端から叩き壊しはじめた。巡査の拳銃を奪い、建物の窓ガラスやウインドウをボンボン破り、車をひっくり返した。ほんのしばらくのうちに街は見るかげもない無残なありさまになつた。

豪華な服を着込み、指にはダイヤの指輪をはめ、髪の毛と髭をぼうぼうと伸び放題に生やし、片手に拳銃、片手に棒切れを持ち、

「おれは神様だ！」と叫びながら、街中を破壊して行く男。この姿が彼自身の望んでいた、宇宙意志そのものの姿だつたのだろうか？

彼の悪業は彼以外の世界では彼の名を残さぬ下らない突発的事故となり、彼は永久に孤独であろう。

とうとう最後に、彼は街なかの車道にぶつ倒れた。そして、アスファルトの上に転がったまま、破壊的衝動を満足させた喜びに、しばし浸っていた。

彼は疲れ切っていた。彼は転がったまま、なおもしばらくはわめき続けていたが、やがてぐっすり眠り込んでしまったのである。

ふと、彼は右足の太股と肩に、激しい痛みと圧迫を感じて眼を覚ました。

眼の前に、自分の身体に乗りかかって来ようとしている大型トラックのタイヤがあった。それは、彼が路上に横になった時に、まだ五メートルばかり前方にいたトラックだった。

彼はあわてて起き上がろうとしたが、タイヤは、彼の肩と右足をしっかりと押さえつけてしまっていた。左手でタイヤを押しもどそうとしたが、むろん無理だった。彼は激痛を感じて唸った。

そして、その大型トラックは、動いているかいないかのゆっくりした速度でのろのろと前進しながら、彼の身体をギリギリと押し潰しにかかったのである。

その時、彼はほとんど悲鳴に近い声で、生まれて始めて神の名を呼んだのだ。

「神様、お助けを！」

〔NULL〕一号、昭和三十五年六月

模倣空間

その二人には、名前がありませんでした。
いやいや、彼ら二人だけではありません。

サキユロス星に住んでいる者には、もともと、みんな名前がないのです。

でも、固有名詞がなくては、物語りにさしつかえます。

では仮にこの二人を、常識的で無神経な名前ですが、タロ、そしてジロ、ということにしておきましょう。

タロとジロは、ある太陽系の第四惑星をはじめて探検し、今円盤型の宇宙船に乗って、サキユロス星に帰る途中です。第四惑星での収穫は、意外に豊富でした。しかし、もうひとつ意外だったことは、第四惑星がすでに処女星ではなかったことです。つまり、すでにどこかの、他の星の人間が訪れていたらしい形跡があったのです。

沙漠には旧式の、大型ロケットの死骸が散らばっていましたし、その他にも、いろいろな大きさのロケットが発着したらしい跡があったのです。

「あの太陽系の、第三惑星の住民の仕わざじゃないかな」